第８４１号　ヤスクニ通信　２０２５年２月９日

日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会

＜祈りのために＞

「ラマで声が聞こえた。／激しく泣き、嘆く声が。／ラケルはその子らのゆえに泣き／慰められることを拒んだ。／子らがもういないのだから。」

（マタイによる福音書２章 17 節：聖書協会共同訳）

ラマの叫びが暴露するのは、私たちの生きる世界がヘロデの世であること、そしてそこに生きる私たちもまた多かれ少なかれ一人のヘロデとして生きているということです。ヘロデは権力のためには手段を選ばず、最後は妻や子まで手にかけます。力と支配を求めてついには誰も信じることができなくなり、誰をも愛さず誰にも愛されず、自分が死んでも誰も悲しむ者はいないと嘆いたヘロデの姿は、人の罪と悲惨を象徴しています。

聖書は、王の誕生を知らされて「不安を抱いた」のは「エルサレムの人々も皆、同様であった」と記します。ヘロデの威光にあやかり、権力のおこぼれにあずかっている者たち、ヘロデの支配から利益を得ている者たちは、まことの王の誕生、真実の支配の到来にむしろ不安を抱くというのです。

祭司長や律法学者も同罪です。王と結んで地位と利益を得ている大祭司の一族はもちろん、ヘロデの問いに素直に答えてしまう律法学者たちも責められてしかるべきです。ヘロデの人間性と振る舞いを知っていれば、なぜ自分たちが呼ばれ、どうして救い主の居場所を問われたのか分かりそうなものです。聖書の解釈としては非の打ち所のない「正解」に辿り着きながら、それがどのように用いられ、いかなる結果を引き起こすことになるかについて考えようとしない律法学者たちは、結果的にヘロデの幼児虐殺に手を貸すことになってしまうのです。

ナチス・ドイツへの抵抗運動に加わり、ヒトラー暗殺計画に関わったとして処刑された神学者ディートリッヒ・ボンヘッファーは、獄中で「真実を語るとは何を意味するか」という短い論文を書いています。それは、秘密警察による尋問の中で、仲間を守るため、罪なき者たちの命のために、「巧みに嘘をつく」ことを余儀なくされた自分の経験にもとづくものでした。そこでボンヘッファーは、「客観的な事実」に逃げ込むことなく、自分の語る言葉に最後まで責任を持つことこそが、「神と人の前で」真実を語ることであると主張しました。

聖書の言葉によって民族絶滅をけしかける政治指導者、聖書の言葉によって侵略戦争を正当化する宗教指導者、そして聖書の言葉によって人権を抑圧しようとする人々の声がそこかしこから聞こえてきます。そこでは「神の言葉」が全体としての聖書から切り取られ、文脈を無視して恣意的に解釈され、「人の言葉」に奉仕させられてしまっています。こうした神の言葉の曲解に対して、教会は責任を持って否を語らなければならないでしょう。私たちは、より真剣に、より責任をもって、そしてより生き生きと、神の言葉を聞き、神の言葉を生き、神の言葉を証しすることが求められています。

（祈り）神様、あなたは生けるまことの神の言葉として、イエス・キリストを世にお遣わしくださいました。道であり真理でありいのちであるこのお方をこそ信じさせ、このお方にこそ従わせ、このお方をこそ証しさせてください。　（芳賀繁浩　福島伝道所牧師）

新シリーズ『日本キリスト教会大信仰問答』第 14 章「終わりの日」を読む（第６回）

粂 広国（函館相生教会牧師）

問２８４　終わりの日に、救いの業を完成するとは、どういうことですか。
答　古い天地は過ぎ去り、新しい天地があらわされ、私たちの卑しい体は栄光の体と変えられ、勝利の冠が与えられることです。

新 Q284－1 救いの業を完成されるのは、どなたですか。
新 A284－1　天に上げられた主イエスは神の右に座しておられますが、終わりの日まで私たちのために執り成しておられます。終わりの日にはそこから来られて、生きているものと死んでいる者とを裁かれます。それが救いの業の完成であり、その主体は再臨のキリストです。

新 Q284－2 古い天地は過ぎ去るということは、どういうことですか。
新 A284－2　神は天と地をお造りになり、最後に人間をお造りになりました。しかし一人の人によって罪がこの世に入ったため、地は汚されました。イエス・キリストが世に来られ、神の支配が地上に始まったのですが、終わりの日はその完成の日です。その日には天も新たにされます。私たちは主イエスが終わりの日について人の子が来ることをいちじくの木のたとえで語られた時の言葉を心に留めなければなりません。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（マルコ 13：31）。

新 Q284－3　新しい天地があらわされるとは、どういうことですか。
新 A284－3　救いが完成された世界は、天も地も、新たにされ、救われた人は、約束どおり神と共に永遠に生きるのです。それは「神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない」という世界です。（ヨハネ黙示録 21：3－4）。

新 Q284－4　卑しい体が栄光の体に変えられるとは、どういうことですか。
新 A284－4　塵から造られた私たちの体は罪の故に塵に還りますが、塵から人間をお造りになることのできる神は、キリストにあって、朽ちない体に復活させてくださるのです。それは、永遠の命をまとっているため、栄光の体とされるのです。「死者の復活もこれと同じです。蒔かれるときは卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです」（コリント一 15：42－44）

問２８５　終わりの日の勝利の保証は、どこに与えられていますか。
答　それは、イエス・キリストの十字架と復活と昇天と聖霊の働きという、終末的な出来事においてです。

新 Q285－1 キリストの十字架と復活と昇天は、終末的出来事なのですか。
新 A285－1　そうです。ですから、キリストの十字架と復活と昇天を既に起こった救いの出来事と信じる者は誰でも、終わりの日の勝利の保証を与えられているのです。終わりの日の勝利とは死に対する勝利で、永遠に神と共に生きることです。キリストが、死に対して勝利してくださったので、何も恐れることはありません。

新 Q285－2 聖霊の働きも、終末的な出来事なのですか。
新 A285－2　そうです。聖霊の働きはキリストの体なる教会において表されます。それゆえ、地上に教会が存在することは、終末的出来事とされるのです。教会に属する者はみな、聖霊によってキリストに似る者とされていきますがその完成は、終わりの日なのです。聖霊は地上を歩む神の民と共におられるのです。

連載５「戦時下の教会資料発掘報告」（北海道中会ヤスクニ社会問題委員会ニュース 2024 年春号より転載）

畑知佳（遠軽教会牧師）

教会の報国実践–前線・銃後一体の奉仕の具体例–

３、伝道集会 ―信徒と町民に対する精神教化―

（前号からの続き）

これに関連して、遠軽教会では無牧師となる 1942 年 6 月まで、実に多くの伝道集会が実施されました。一部、講師と講演題を紹介しますと、伊達教会牧師土居浩郎による講演「日本の世界的使命と国民精神の聖化」（1938 年 2 月 6 日実施）。大会書記村岸清彦による二講演「キリスト教の生死観」、「時局の動向とキリスト教」（1939 年 7 月 15、16 日実施）。北一条教会長老西村久蔵による講演「戦争と信仰を談る」（1940 年 2 月 18 日、皇紀二六〇〇記念 北見地方基督教徒親睦修養会において）。その他、日曜学校局理事長小平国雄や北一条教会牧師小野村林蔵、大森教会牧師佐波亘など名立たる方々が、遠軽で講演会を開き、時には洗礼式も執行し、また時には大・中会からの献金の依頼を行いました。おそらくこうした集会の多くは、遠軽教会独自で計画したものではなく、大・中会で計画され各教会を巡回する形で行われました。先に上げた山下操六先生帰還歓迎集会も、北海道巡礼伝道旅行の一環であったとの記録があります。

４、その他の奉仕 ―鐘の奉献―

さて、遠軽教会は報国の使命として会員と町民の精神教化に努めてきたことを申し上げましたが、その他の具体的な報国の実践としては、終戦までの約一年間に託児所を運営したことと、会堂の一時的な徴用に応じたこと、そして教会の鐘を奉献したことを上げることができます。ここでは教会の鐘についてだけお話しします。

遠軽教会の高くそびえる尖塔には、1924 年に教会独立を記念してピアソン宣教師から送られた鐘が据え付けられていました。この鐘は一度 1931 年に会堂が火事で焼失した際、溶けて損傷してしまいますが、1935 年に鋳直して現会堂に再び据え付けられました。しかし、1942 年 2 月に小会は、鐘の献納と 10 か月間の銅鉄回収運動実施を決議します。そうして同年 12 月のクリスマス礼拝で鐘を鳴らしたのを最後に、教会の鐘は集まった鉄屑と一緒に国に献納されました。このことは当時新聞記事にもなり「平和を告げる鐘…決戦下鉄回収運動に決然と応召した」と報じられました。また 1952 年の教会月報の一文にはこうあります。「その美しい音が四隣に及んでいた教会の鐘は、鉄瓶や弁当箱と一緒に日米戦に参加して出陣したのは昭和十七年であった。おそらくどこかで無慙な最後を遂げたことであろう」。

↑遠軽教会現会堂 1932 年献堂

旧日本基督教団が献金を募って軍用機を献納したのは有名な話ですが（滝川教会には「日本基督教団號」の名が刻まれた艦上爆撃機の絵葉書が残っています。遠軽教会の“平和”の鐘もまた軍用機か何かに形を変えて殺戮の道具となったことに心を痛めます。

戦後教会独立 50 周年を記念して再び据えられた教会の鐘は、現在原水爆禁止遠軽町民協議会の依頼を受けて、広島・長崎の原爆投下日時にあわせて鳴らしています。遠軽教会の鐘が将来にわたって平和の鐘であり続けるために、鐘の音を聞くたびに、この悲しい歴史を思い起したいと思います。（次号に続く）

＊編集者による追記：北海道新聞に本連載と関連する記事が紹介されましたので、ヤスクニ通信本号に同封致しました。ご参照下さい。

＜靖国関連ニュース＞

○沖縄戦の牛島司令官「辞世の句」再び掲載強行 陸自 15 旅団サイト

陸上自衛隊第 15 旅団（那覇市）は 1 日、沖縄戦を率いた日本軍第 32 軍の牛島満司令官の辞世の句の掲載が問題になっていたホームページ（HP）を更新した。県民の批判を受け、辞世の句を大きな文字で目立たせていた画像を昨年 10 月末にいったん取り下げていたが、部隊史の画像をそのまま載せる形で異論の強い辞世の句を再掲載した。

15 旅団総務課は 1 日、見直しの理由について、「（辞世の句掲載に）さまざまな意見があった。2027 年度までに（旅団から）師団になるにあたって県民の理解が不可欠だ。歴史的背景も知ってもらうため、当時の資料をそのまま示すことにした」と取材に説明した。

「日本軍と一体性はない」

また、日本軍と 15 旅団の連続性については、「あくまで自衛隊は日本軍とは別物で、一体性はない」と否定した。

問題になった辞世の句は、沖縄戦で住民を巻き込む「南部撤退」の命令を決定した牛島司令官が 1945 年 6 月 18 日、「決別電」と合わせて陸軍首脳に向けて発したもの。「秋待たで　枯れ行く島の　青草は　皇国の春に　甦らなむ」は戦場となった島が「皇国」の下でよみがえることを願う内容だ。

体験者ら批判、いったん取り下げ

15 旅団は沿革を紹介するページに、前身の臨時第 1 混成群の桑江良逢群長の 1972 年 5 月の訓示と共に「牛島軍司令官辞世」と書かれた画像を紹介していた。2024 年 6 月の琉球新報の報道で表面化した後、沖縄戦の体験者や研究者を中心に批判が相次ぎ、同年 10 月末に「HP リニューアル」を理由にいったん取り下げていた。（後略）（琉球新報、25.01.01）

○「戦没者名簿の靖国神社への提供は違法」 望まぬ合祀に賠償求めた韓国籍遺族の訴え認めず 最高裁で敗訴確定（靖国神社韓国人合祀違憲訴訟）

第 2 次世界大戦で旧日本軍に徴用されて戦没した韓国人の遺族らが、国が無断で戦没者名簿を靖国神社に提供して合祀され、人格権を侵害されたとして、国に慰謝料を求めた訴訟の上告審判決で、最高裁第 2 小法廷（岡村和美裁判長）は 17 日、遺族側の上告を棄却した。遺族側敗訴とした一、二審判決が確定した。一方で、検察官出身の三浦守裁判官が反対意見を述べた。

◆「政教分離違反の可能性」、判事 1 人は反対意見

三浦裁判官は、情報提供した国と靖国神社が合祀を連携して行ったなどとする遺族の主張を前提にすれば「憲法が定める政教分離の規定に反する可能性がある。合祀を望まない韓国人遺族がいることも想定しながら合祀を推進しており、国の責任は極めて重い」と指摘した。その上で、二審東京高裁判決は遺族の主張などについて「必要な審理を尽くしていない」とし、審理を高裁に差し戻すべきだとした。

靖国神社の合祀を巡る国の情報提供について最高裁が判断を示すのは初めて。裁判官 4 人中 3 人の多数意見は、不法行為から 20 年で損害賠償請求権が消滅する「除斥期間」が過ぎた後に提訴したとして上告を退けた。三浦裁判官は、この判断も「被害者にとって著しく酷であり不合理」として、除斥期間の適用についても検討が尽くされていないと指摘した。

一、二審判決によると、遺族はいずれも韓国籍で、戦死した父親らが 1959 年、国が提供した戦没者の名簿を基に靖国神社に合祀された。遺族らは「家族の情報を国が無断提供したことはプライバシー権の侵害で、政教分離の規定にも反する」などとして 2013 年に提訴した。

2019 年 5 月の一審東京地裁判決は、国の情報提供について「遺族の心情を害する可能性はあっても、権利や利益を侵害するとは言えない」と判断。2023 年 5 月の二審判決も一審判決を支持し、控訴を棄却した。（東京新聞、25.01.17、三宅千智）

○「石破首相動静」2025 年 1 月 6 日

08:31 東京・赤坂の衆院議員宿舎発
08:42 JR 東京駅着
09:00 のぞみ 121 号で同駅発
10:39 JR 名古屋駅着
10:43 徒歩で同駅発
10:44 近鉄名古屋駅着
10:50 近鉄特急で同駅発
12:12 三重県伊勢市の近鉄宇治山田駅着。
　　三重県の一見勝之知事、田村憲久自民党県連会長ら出迎え
12:16 同駅発
12:20 同市の伊勢神宮外宮着。
　　赤澤亮正経済再生担当大臣ら閣僚と参拝
12:45 同所発
12:52 伊勢神宮内宮着。参拝
13:26 神楽殿で神楽奉納（～13:50）
13:56 神宮司庁前でボーイスカウト日本連盟伊勢第 7 団、ガールスカウト日本連盟三重県第 1 団から花束贈呈。
　　記念撮影（～14:00）
14:10 神宮司庁で年頭記者会見（～14:47）
14:52 同所発
15:00 近鉄宇治山田駅着
15:15 近鉄特急で同駅発。
　　一見知事、田村同党県連会長ら見送り
16:36 近鉄名古屋駅着
16:38 徒歩で同駅発
16:39 JR 名古屋駅着
16:40 愛知県の大村秀章知事、丹羽秀樹同党県連会長らと面会（～16:54）
16:57 のぞみ 34 号で同駅発
18:33 JR 東京駅着
18:37 同駅発
18:47 官邸着
（NHK、25.01.07）

841号ヤスクニ通信　2025年2月9日
発行 日本キリスト教会靖国神社問題特別委員会
発行・編集　粂広国（函館相生教会）

＜編集後記＞ 石破総理大臣の伊勢神宮参拝は極めて遺憾です。同封の抗議文をご参照下さい。H.K.